

キャリアは、ひとつじゃない。——副検事という選択。

【自己紹介】 刑事部副検事 検察庁に入庁して16年目

(検察事務官時・捜査公判5年、検務4年、情報システム管理3年を経験)

1. 入口——なぜ検察事務官になったのか

県庁や地元市役所で地方行政に携わるか、国家公務員として行政に携わるか悩んでいたところ、官庁訪問で検察庁の業務や職場の雰囲気を知り、その業務内容や職場環境に魅力を感じたためです。

官庁訪問時に、副検事への任官制度があることを知りましたが、その際はまだ副検事への任官までは意識していませんでした。その後、初めて交通部所属の副検事の立会事務官をした際、その副検事から、副検事に任官することを勧めていただき、意識するようになりました。

2. 現場——検察事務官として、どのような仕事をしていたのか

また、どんなことを考えて、仕事をしていたのか

印象に残った経験は複数ありますが、その中でも本部係検事（殺人や強盗などの重大事件等を担当する係）の立会事務官をした際、様々な難事件に携わったことが印象に残っています。現場検証に行ったり、遠方の関係者に話を聞きに行くなどし、検事、警察官と共に汗水流し、充実した日々を過ごしたことは印象深いです。

立会事務官を3年経験した後、次の異動で立会事務官を離れました。それからは事件担当や情報システム管理課で勤務し、そこでもやりがいのある仕事をさせていただきました。た

だ、入庁10年目を迎え、今後、自分がどのような仕事に携わりたいか考えたとき、もっと捜査・公判に関わりたいと思うようになりました。

そう考えた理由は、その幅広い業務内容にあると思います。また、検察官と共に捜査・公判に携わり、司法権に密接する業務ができるのが大きな魅力であると思います。

3. 決断——なぜ、副検事を目指したのか

仕事が魅力的というのがありますが、これまでに一緒に働いた検事、副検事が魅力的だったからです。そして、仕事が大変な中でも、責任感を持って真摯に仕事に向き合っている検事たちの姿に感銘を受け、自分自身もそのようになりたいと思ったからです。一度限りの人生、チャレンジする価値、魅力があるとも思いました。

副検事試験には論述試験があるのですが、論述に自信がなく、どのように仕事をしながら勉強をすればよいのか不安がありました。

また、副検事として働くことについては、希望しても適性があるか否かは別問題なので、仮に試験に合格しても仕事をこなしていけるかどうかの不安もありました。

副検事を目指す公表した際には、上司、同僚らから応援の言葉をいただきました。また、ある検事が副検事試験の勉強指導をしてくださり、論述の添削や相談など、手厚いサポートをしていただきました。

4. 現在——検察事務官としての経験はどう生きているか

副検事につく立会事務官は、その多くが立会業務を初めて行う若手職員のため、最初は分からないことが多いと思います。そこで、かつて検察事務官として働き、これまでに得た知識等を若手立会事務官に教えるなどしています。こういった場面で、検察事務官としての経験が生きていると思います。

検察事務官としての経験により、検察官が担当しない仕事の流れや量などを把握でき、仕事の組み立てが円滑に行えていると思います。一方で、副検事としての経験により、捜査・公判に必要な仕事・モノは何かということを検察官目線で把握することができるようになったと思います。

副検事になり、検察官の目線で捜査・公判を見ることができるようになったと思うので、もう一度、検察事務官として働くのであれば、検察官が求めるものを一足先に用意するなどし、検察官をより手厚くサポートすることを意識したいと思います。

5. 未来——その先に見えているもの

様々な事件に取り組むことで、捜査・公判のスキルを高めたいと考えています。また、私が教えてもらったように、他の方々にも、副検事の魅力を伝えていき、少しでも多くの人に副検事に任官してもらい、共に捜査・公判に携わりたいと考えています。

仕事を行う上で必要不可欠なものは、コミュニケーション能力だと思います。事件は人間が起こすわけであり、同じ人間はいません。1人1人に考えがあり、その人間相手に捜査・公判をするわけですから、コミュニケーションを取って人間を知るのが重要だと思います。もちろん、上司、同僚らも人間であり、円滑に仕事をする上でもコミュニケーション能力は必須です。業務を通じ、コミュニケーション能力を高めたいと思います。そして、適正・的確に事件を処理し、治安を守ることに貢献したいと考えます。

5. みなさんへのメッセージ

《検察事務官を目指す方へ》

検察庁には検察官が必要ですが、当然、検察事務官も必要です。職員数としては検察事務官の方が圧倒的に多いのです。検察事務官の幅広い業務活動により、検察官の業務が円滑に行

われています。検察官には、パートナーとして検察事務官が必要不可欠なのです。これから、様々な業務を経験しながら、共に社会正義実現のために頑張りましょう。

《将来、副検事という道を視野に入れている方へ》

検察事務官として働きながら副検事試験に挑むのは決して楽ではありませんが、全く合格できない試験ではありません。やるとやらないとでは大きな違いだと思います。少しでも副検事になってみたいと思うのであれば、是非、チャレンジしてみてください。忙しくも充実した日々が待っていると思います。

《高校生・大学生の方へ》

社会に関心があり、悪いことやルール違反を許せないという気持ちがあれば、検察事務官になる素質ありだと思います。また、真実を追求することに興味があれば、それも素質ありだと思います。かく言う私は、某国民的ミステリー漫画が好きで、真実追求に関心があり、検察庁に惹かれました。検察官と共に働ける職場はそうそうありません。一緒に社会正義を目指してみませんか？